様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６１７
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０３２５９

研究課題名（和文）戦争叙述のための博物館の可能性―歴史の方法の有効性について

研究課題名（英文）Potentiality of the museum for historiography of war: effectiveness of the method of history

研究代表者
佐々木　真（SASAKI, Makoto）

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：７０２６５９６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ヨーロッパを中心に戦争・軍事博物館の歴史と現在の展示内容を調査・研究し、今日の歴史学における戦争叙述の問題を検討した。数多くの博物館の調査の結果、ヨーロッパの多くの博物館では、ナショナリズムと関連した従来の一国史的な展示からヨーロッパを意識した展示への変化がみられた。さらに、その他の地域を含め、武器や戦闘といった旧式の展示から戦争を多角的に展示しようとする試みが認められた。本研究により、戦争・軍事博物館が歴史学の研究成果の発現の場であると同時に、社会との関わりとして、集合的記憶や「公共史」を表現する場であることが、より具体性をもって明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to investigate the history and the exhibition of war museums in Europe, and to examine the problem of the narrative of war in historiography. From the research on many museums, this project demonstrated two major matters. Firstly, in European museums, war was not only expressed as the brave deeds of Nation States which cultivated the nationalism, but as the common experience of the European people. Secondly, most museums made every effort to show the war as social phenomena, and the old type of exhibition, which emphasized arms, uniforms and battles, withered up. This project revealed that the war museum was the outcome of the History as social science, and simultaneously, that of the “Collective Memory” or “Public history” which closely related to our modern society.

研究分野：人文学・史学・ヨーロッパ史

キーワード：ヨーロッパ史　軍事史　戦争　博物館　記憶　歴史叙述　歴史認識　平和

１．研究開始当初の背景

（１）歴史学における戦争叙述の今日性

歴史学における戦争叙述はきわめて今日的な問題である。第一の理由が、ナショナリズムの涵養と密接に関連していた従来の一国史的戦争叙述が、冷戦の終結やグローバル化、欧州統合を背景にその有効性を失いつつあることである。第二の理由が、ヨーロッパでは 1960 年代以降に、日本でも 21 世紀に入って、軍事の多様な側面を対象とする「新しい軍事史」の研究が進展し、単なる戦史ではない社会との関係を見据えた戦争叙述が追求されていることである。今日の歴史学では、新たな戦争の語りが必要とされている。

（２）従来の軍事・戦争博物館

19 世紀末以降に設立された戦争･軍事博物館は、武器や戦争、戦闘の展示を通じて、軍事技術や敵国への勝利を喧伝し、軍事面より国民形成に寄与した。また、徴兵制や戦時動員により、国民は不可避的に軍事と関わることとなったが、博物館の展示は、国民動員に必要な「軍隊の国民化」を推進する役割も果たしていた。

（３）軍事・戦争博物館研究の今日的有効性

だが、今日では国威発揚や愛国心の陶冶という目的から離れ、新たな展示を模索する博物館が多く存在している。たとえば、フランスのソンム県ペロンヌ市にある「大戦歴史博物館」(1992 年開館)では、第一次世界大戦が社会史的・文化史的観点から扱われ、英独仏三国の状況が全く対等に展示されている。併置された研究センターによる国際共同研究とともに、ここでは国民史を超えた戦争展示が模索されていた。また、ドイツの「連邦軍軍事博物館」(2011 年開館)は、「多面的に戦争の現実に迫る」という方針のもとで、ファッションや動物と軍事など、文化的な要素を取り入れた展示や、個人史から戦争を叙述する試みがなされている。

（４）展示実践における博物館の独自性

博物館展示は、単なる歴史研究の成果ではなく、館をとりまく政治的・社会的な磁場や展示技術(演出)の影響を受けて歴史学とは異なる文脈の展示がされ、それが逆に歴史叙述に影響することも考えられる。このような展示と歴史叙述の双方向性を解明することも、戦争叙述と社会との関係を検討する際には重要である。

（５）以上より、戦争・軍事博物館の歴史や新しい動向を調査し、その原因を探ることは、歴史学における戦争や軍事の新たな叙述に有益な示唆を与えることが予想されるため、本研究を企画した。

２．研究の目的

（１）本研究の目的は、今日の歴史学における戦争叙述の課題に対処するために、19 世紀以降にヨーロッパ各国で設立された「戦争・軍事博物館」の歴史とそれらの現在の展示内容を調査・研究し、以下の諸点を解明することである。

（２）独仏英を中心に、戦争・軍事博物館の設立の意図や設立までの経緯、当初の展示内容、およびそれへの評価を同時代の史料に即して明らかにし、研究の出発点とする。

（３）新傾向のものを中心に、今日の各博物館の展示への取り組みの調査から、戦争・軍事展示が直面している課題を解明し、歴史学研究と博物館展示との相互影響関係を明らかにする。

（４）海外の関係者との意見交換により、日本とヨーロッパでの実践や課題を比較考察し、博物館展示と戦争叙述への理解を深める。以上を通じて、今日の歴史学において戦争や軍事を扱うことにどのような意味があるのか、またそれらはいかに描かれる可能性があるのかを考察する。

（５）「何をどのようにして」戦争を記憶化するのか、また戦争展示をいかに行うかについて、ヨーロッパの動向が一致しているわけではない。この課題に関して、戦後の日本ではヨーロッパとは異なる文脈で戦争(平和)展示実践が試みられており、ヨーロッパ以外の地域との比較を通じて、研究の視野を広げる。

３．研究の方法

（１）研究の中心は、なるべく多くの博物館を視察し、異なる時代や地域を対象とするメンバーの間で議論を組み重ねることであった。特に、初年度の活動を通じ、視察すべき対象が数多く存在すること、また国内の博物館とのとの比較が重要であることが判明し、研究期間を通じてなるべく多くの博物館を訪問することを第一とした。

（２）視察したヨーロッパの博物館は以下の通り。2015 年度：フランス国内の博物館。大戦博物館(モー)*、軍事博物館(パリ) *、平和祈念博物館(カン)、ノルマンディーの戦跡、独仏戦争・併合博物館(グラーヴロット) *、マジノ線要塞博物館(レンバッハ) *、アルザス・モーゼル記念館(シルメック) *、ヴィルヘルム 2 世要塞(ミュッシヒ) *、オー・ケニクスブール城(オルシュヴィラー)、ル・ランジュ第一次世界大戦記念館(オルベ) *。2016 年度：帝国戦争博物館(ロンドン)、帝国戦争博物館北館(マンチェスター)、ラ・クーポール(第二次世界大戦と宇宙開発博物館：ノール県、フランス) *、王立軍事史博物館(ブリュッセル、ベルギー)、イン・フランダース・フィールズ博物館(イーペル、ベルギー)、ベルギー南部の戦跡・戦争墓地・記念碑。*印は学芸員等と意見交換をした館(以下同)。

（３）視察した日本の博物館は以下の通り。2015 年度:海上自衛隊鹿屋航空基地史料館*、万世特攻平和祈念館、知覧特攻平和会館、熊

本市田原坂西南戦争資料館*、国立歴史民俗博物館、予科練平和記念館*、筑波海軍航空隊記念館*。2016 年度：福山ホロコースト記念館*、海上自衛隊第一術科学校*、入船山記念館、呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)、海上自衛隊呉史料館(てつのくじら館)、広島平和記念資料館(原爆資料館)、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館。2017 年度：舞鶴引揚記念館*、赤れんが博物館*、北吸浄水場*、海軍記念館*、旧東郷邸(以上、舞鶴市) *、立命館大学国際平和ミュージアム*、伏見市深草地区の戦争遺跡、大阪国際平和センター(ピースおおさか)。

（4）それまでのヨーロッパと日本における調査の結果、両地域に加えて第三の比較の参照軸の設定が有益であるとの結論に達した。そのため、2017 年度は、日欧とは異なる戦争体験を有してきたアメリカの博物館を調査することとし、ハワイ州オアフ島の諸施設を訪問した。調査先：戦艦アリゾナ記念館、戦艦ミズーリ、パールハーバー太平洋航空博物館、潜水艦ボーフィン、アメリカ陸軍博物館、ビショップ博物館。

４．研究成果

（1）本研究の目的のひとつが、今日の各博物館の展示への取り組みの調査から、戦争・軍事展示が直面している課題を解明し、歴史学研究と博物館展示との相互影響関係を明らかにすることであるが、この点については、当初の予想を上回る成果が得られた。

（2）ヨーロッパの博物館につては、各館のコンセプトやそれぞれが直面する課題の差異が明らかとなった。パリの軍事博物館(アンヴァリッド)とアルザスの地方博物館といった館の位置づけによる差、展示におけるストーリー性の付与の程度、演出のあり方などの違いなど、視察で判明した差異は設立主体や設置目的などの客観的な条件の違いを背景とし、それぞれの博物館が、どのような歴史の語りを構築しようとしているかによって生じていることが非常によく理解できた。

（3）パリの軍事博物館の副館長の David Guillet 氏がイギリスの帝国戦争博物館(IWM、ロンドン)を指標としていると述べていたように、ヨーロッパの多くの博物館に共通点が認められた。

（4）第一の共通点が、戦争や軍事を多角的に展示しようとしたことである。帝国戦争博物館の第一次世界大戦展示に典型的なように、武器や制服といった旧来の軍事博物館の展示物に加え、ジオラマによる戦争そのものの内容、経済や銃後の生活などのありようがバランス良く展示されており、コンパクトかつ適切に示された解説や映像資料の利用が一般化している。

（5）もうひとつの特色が、一国史的な展示の相対化である。たとえば、銃後の生活の展示で典型的なものが戦時公債の募集ポスターであるが、ほとんどの館では各国のものが同列に展示されていた。また、帝国戦争博物館では二層にわたってホロコーストの展示がなされていたように、ヨーロッパという枠組みが強く意識されていたことも特徴的であった。戦争展示においても国民国家の相対化されているわけだが、それはヨーロッパへの意識と、アルザスで見られたように地方への意識に二極化される傾向がある。ヨーロッパの戦争・軍事博物館の多くは、ヨーロッパが直面している根治的課題に対応していると言えよう。

（6）日本の博物館との比較でも大きな成果が得られた。日本の展示は一国史的なものが多く、戦争被害の展示が主流ではあったが、西南戦争資料館や予科練平和記念館のように、近年設立・改装された館を中心に、平和に力点を置くだけでなく、戦争を新たなかたちで表現しようとする姿勢がみられた。

（7）アメリカについても一国史的な展示が主流であったが、パールハーバーなどでも国威発揚というよりは戦争という歴史的事実を冷静に伝えようとする傾向が認められた。

（8）以上より、傾向に差異があるとは言え、各国の戦争・軍事博物館では、戦争の記憶をいかの表現するのかという点に関して、新たな展示が模索されていた。戦争博物館の研究は、「集合的記憶」や「公共史」の問題とも深く関わっており。歴史学の研究のさまざまな示唆を与えてくれることが判明した。

（9）研究期間中は調査に主眼を置いたため、研究成果の公表は今後の課題である。ただ、剣持久木編『よくわかるフランス近現代史』の各章には博物館に関するコラムがあり、そこで本研究の成果の一部が公表されている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 33 件）

① 丸畠宏太、プロイセン軍制改革と軍旗宣誓問題—国民軍隊における兵士の忠誠の対象をめぐって、ヨーロッパ文化史研究（東北学院大学ヨーロッパ文化研究所）、第 19 号、29-39 頁、2018 年、査読無
https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=24050&item_no=1&page_id=34&block_id=86

② 原田敬一、東学農民運動と日本メディア、人文学報（京都大学人文科学研究所）、111 号、163-207 頁、2018 年、査読有
https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/231144/1/111_163.pdf

③ 鈴木直志、ラウクハルトとプロイセン軍、ヨーロッパ文化史研究（東北学院大学ヨーロッパ文化研究所）、第 19 号、5-27 頁、2018 年、査読無
https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=24049&item_no=1&page_id=34&block_id=86

④ 斉藤恵太、気まぐれな運命の女神—近世ヨーロッパにおける戦争と軍隊の表象、桃山歴史・地理、53 号、3-34 頁、2018 年、査読無

⑤ 佐々木真、西欧近世・近代史研究の動向とその課題—3 冊の近著を題材に—、歴史学研究、957 号、17-24 頁、2017 年、査読有

⑥ ゲルト・クルマイヒ（西山暁義、解題・翻訳）、ヴェルダン—戦いとその神話、軍事史学、52-4、4-30 頁、2017 年、査読無

⑦ 鈴木直志、連隊簿からみた近世プロイセン軍隊社会（上）—1792 年の歩兵第三連隊の事例、中央大学文学部紀要（史学）、第 62 号、135-162 頁、2017 年、査読無
http://ir.c.chuo-u.ac.jp/repository/search/item/md/-/p/10641/

⑧ 鈴木直志、「広義の軍事史」の射程、海外事情（拓殖大学海外事情研究所）、第 65 巻 4 号、38-51 頁、2017 年、査読無

⑨ 松本彰、アート、フォーク、コメモレーション、フェスティヴァル、文化人類学研究（早稲田大学）、17 号、86-67 頁、2017 年、査読有り

⑩ 西願広望、『戦争と文学』を考える視座、軍事史学、209 号、40-47 頁、2017 年、査読有

⑪ 丸畠宏太、国民国家黎明期（19 世紀前半）の兵営生活の一断面—プロイセン軍志願兵 F.W.ハックレンダーの回想記から—、ゲシヒテ、第 9 号、19-33 頁、2016 年、査読無

⑫ 丸畠宏太、ドイツはナチスの時代をどう語ってきたか、今改めて「歴史認識」を問う（敬和カレッジ・ブックレット）、No.22、29-41 頁、2016 年、査読無

⑬ 剣持久木、第 22 回国際歴史学会議加盟委員会：第二次世界大戦史国際委員会　第二次世界大戦の文化考察・アジアにおける大戦の問題点と遺産、歴史学研究、943 号、44-49 頁、2016 年、査読なし

⑭ Akiyoshi Nishiyama, Geschichtskrieg über den Weltkrieg? Die aktuellen Debatten um Weltkultur- und Weltdokumentenerben in und um Japan, Dhau. Jahrbuch für außereuropäische Geschichte,, No.1, pp.185-200, 2016、査読無

⑮ 鈴木直志・谷口眞子・笹部昌利・吉澤誠一郎・ピエール・セルナ、国際シンポジウム「革命と軍隊—明治維新、辛亥革命、フランス革命の比較からみえてくるもの」、早稲田大学高等研究所紀要、第 8 号、1-19 頁（鈴木直志担当箇所：17-19 頁）、2016 年、査読無
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=27304&item_no=1&attribute_id=162&file_no=1

⑯ 西願広望、功利主義の戦争文化とバレールの革命戦争論—世界史再考のために、日仏歴史学会会報、31 号、3-18 頁、2016 年、査読有

⑰ 斉藤恵太、宿営社会の住民たち—三十年戦争における宿営地の空間編成と軍隊の社会構造、桃山歴史・地理、第 51 号、3-28 頁、2016 年、査読無

⑱ 佐々木真・古谷大輔、近世史研究の現在と「礫岩のような国家」への眼差し、西洋史学、第 257 号、58-68 頁、2015 年、査読有

⑲ 辻本諭、18 世紀イギリスの複合国家体制と軍隊—アイルランドにおける陸軍、とくに兵士のナショナリティに注目して—、史潮、新 77 号、4-24 頁、2015 年、査読無

⑳ 斉藤恵太、近世バイエルンにおける都市貴族の変容と軍務—カトリック・リーガ（1609～1635）の軍務官を例に、比較都市史研究、第 34 号 1 編、35-48 頁、2015 年、査読有

〔学会発表〕（計 40 件）

① Satoshi TSUJIMOTO, 'Military history from a wider perspective: recent scholarship on the British army and society in the long eighteenth century', Rethinking Social History 2, Institute of Human Sciences Open Seminar, Toyo University, 2018.

② Keita SAITO, Administrator oder Krieger? Der bayerische Kriegskommissar während des Dreißigjährigen Krieges, International Workshop: Administration, Logistik und Infrastrakturen des Krieges in der Frühen Neuzeit. Sektion II: Administration des Krieges, Hamburg, 2018.

③ 丸畠宏太、19 世紀ドイツの兵士の世界—規律化と国民化、近現代史研究会（於：立正大学）、2017 年

④ 剣持久木、公共史の射程—ヨーロッパにおける歴史認識越境化と東アジア、アジア太平洋地域歴史認識問題研究会（於：京都外

国語大学)、2017 年

⑤ 剣持久木、反戦平和運動の挫折から仏独歴史和解へ：歴史認識問題解決のヒントを求めて、第 17 回日韓歴史家会議（於：東北亜歴史財団（ソウル））、2017 年

⑥ Akiyoshi NISHIYAMA, "Between Border Regions and Oversea Colonies: The German Empire as a Model for Imperial Japan on the Eve of the First World War", Annual Meeting of Association for Asian Studies (AAS-in-ASIA). Panel 086: Beyond Comparison: Japan and its Colonial Empire in Trans-Imperial Relations. (Korea University, Seoul) 2017.

⑦ 辻本諭・田中伸・前田佳洋・矢島徳宗、歴史の捉え方—アイルランドの歴史を題材にして、 近世イギリス史研究会年次例会シンポジウム「歴史研究と中学校・高等学校の歴史教育—イギリス史の視点から」（於：早稲田大学)、2017 年

⑧ 鈴木直志、ドイツにおける軍旗宣誓、日本西洋史学会第 67 回大会小シンポジウム「忠誠のゆくえ—近代移行期における軍事的エトスの比較史—」(於：一橋大学)、2017 年

⑨ 鈴木直志、18 世紀後半におけるプロイセン軍将校の軍制改革論議、比較国制史研究会（於：北海道大学)、2017 年

⑩ 西山 暁義、コメント「グローバリゼーションのなかで歴史を書くこと：近代歴史学思想へのトランスナショナル・アプローチ」、日本西洋史学会第 66 回大会（於：慶応義塾大学)、2016 年

⑪ 松本彰、近現代ドイツの「名誉・忠誠・愛国心」—ドイツ諸国家の国歌を中心に—、早稲田大学高等研究所セミナーシリーズ〈新しい世界史像の可能性〉（於：早稲田大学高等研究所)、2016 年

⑫ 斉藤恵太、近世イタリアの傭兵隊長と神聖ローマ皇帝軍—三十年戦争におけるガラッソとピッコロミニの例から、イタリア中近世史研究会（於：奈良女子大学）2016 年

⑬ 剣持久木、歴史認識の越境化と公共史—博物館、メディア、教科書—、日本西洋史学会第 65 回大会小シンポジウム「歴史認識の越境化と「公共史」—博物館、メディア、教科書—」（於：富山大学）2015 年

⑭ 西山暁義、ヨーロッパ国境地域の記憶の場：アルザス・モーゼル博物館を例に、日本西洋史学会第 65 回大会小シンポジウム「歴史認識の越境化と「公共史」—博物館、メディア、教科書—」（於：富山大学）2015 年

⑮ 西山暁義、反仏＝親独、親仏＝反独？ ドイツ帝国アルザス・ロレーヌと「愛国心」（1871-1918 年)、早稲田大学高等研究所セミナーシリーズ〈新しい世界史像の可能性〉（於：早稲田大学高等研究所）2015 年

⑯ 鈴木直志、「歴史の場」としての『戦争論』—クラウゼヴィッツと近世の戦争、2015 年度日本クラウゼヴィッツ学会シンポジウム（於：文京シビックセンター)、2015 年

⑰ 松本彰、国歌に歌われたドイツ—プロイセン、オーストリア、ドイツの国歌とナショナリズム、九州歴史科学研究会　戦後 70 年記念シンポジウム（於：福岡大学)、2015 年

⑱ 斉藤恵太、近世バイエルンにおける軍務官制度の展開—三十年戦争期の傭兵軍と君主権力、史学会第 113 回大会(西洋史部会、於：東京大学)、2015 年

⑲ 斉藤恵太、近世バイエルンにおける軍務官の名誉と忠誠—役人と軍人、領邦君主と皇帝のはざまで、早稲田大学高等研究所セミナーシリーズ〈新しい世界史像の可能性〉（於：早稲田大学高等研究所)、2015 年

〔図書〕（計 20 件）

① 佐々木真、図説 ルイ 14 世、河出書房新社、2018 年、151 頁

② 剣持久木編、越境する歴史認識：ヨーロッパにおける「公共史の試み」、岩波書店、2018 年、213 頁（剣持久木担当箇所：1-51 頁、211-213 頁、西山暁義担当箇所：157-185 頁）

③ 剣持久木編、よくわかるフランス近現代史、ミネルヴァ書房、2018 年、220 頁（佐々木真担当箇所：2-17、20-23 頁、西願広望担当箇所：24-54 頁、剣持久木担当箇所：80-81、112-119、122-137、140-141、161、170-171 頁）

④ Sous la direction d'Etienne François et Thomas Serrier, avec Pierre Monnet, Akiyoshi Nishiyama, Olaf B. Rader, Valérie Rosoux et Jakob Vogel, Europa, notre histoire. L'héritage européen depuis Homère, Les Arènes, Septembre, 2017, 1385p: (I Presences du Passé) "Introduction" (avec Valérie Rosoux), pp.21-23; "La réconciliation vue d'Asie" (pp.201-204); (III Mémoires-monde) "Meiji. Le Japon sous influence" (pp.1207-1214).

⑤ 歴史学研究会編、歴史を社会に活かす・楽しむ・学ぶ・伝える・観る、東京大学出版会、2017 年、310 頁（西山暁義担当箇所：Ⅳ-5 ヨーロッパにおける歴史博物館と国境地域—２つの事例から、299-308 頁）

⑥ 平田雅博・割田聖史・安村直樹・佐々木洋子・西山暁義・川崎亜紀子・川手圭一・原聖、帝国・国民・言語—辺境という視点から、三元社、2017 年、289 頁（西山暁義担当箇所：105-131 頁）

⑦ 佐々木真、ルイ 14 世期の戦争と芸術—生み出される王権イメージ、作品社、2016 年、516 頁

⑧ 佐々木真、増補新装版 図説 フランスの歴史、河出書房新社、2016 年、183 頁

⑨ 石田勇治・福永美和子編、想起の文化とグローバル市民社会、勉誠出版、2016 年、435 頁（剣持久木担当箇所：占領期表象の現在—協力・抵抗・沈黙から適応・人道に対する罪へ—、121-144 頁）

⑩ 剣持久木・竹中幸史・杉本淑彦・八木尚子・角田奈歩・中山俊・長井伸二・福田美雪・北河大二郎・岡部浩史・津森圭一・工藤晶人・坂本尚志・渡辺和行・上原良子、教養のフランス近現代史、ミネルヴァ書房、2015 年、347 頁（剣持久木担当箇所：第 11 章「両大戦間期の社会」173-189 頁、第 14 章「第二次世界大戦下のフランス」227-244 頁）

⑪ 近藤和彦・西山暁義・佐藤昇・千葉敏之・加藤玄・小山哲・後藤はる美・天野知恵子・伊東剛史・勝田俊輔・平野千果子・池田嘉郎、ヨーロッパ史講義、山川出版社、2015 年、243 頁（西山暁義担当箇所：第 10 章「「アルザス・ロレーヌ人」とは誰か—独仏国境地域における国籍」、185-204 頁）

⑫ 青木康・辻本諭・仲丸英起・松園伸・薩摩真介・一柳峻夫・金澤周作・川分圭子・水井万里子・君塚直隆・ジョナサン・バリー、イギリス近世・近代史と議会制統治、吉田書店、2015 年、329 頁（辻本諭担当箇所：第 4 章「王政復古期における五港統治と下院議員選挙」85-111 頁）

⑬ 南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵編、新しく学ぶ西洋の歴史—アジアから考える、ミネルヴァ書房、2015 年、420 頁（鈴木直志担当箇所：第 3 章 4 節「プロイセン軍事官僚国家の発展」72-73 頁）

６．研究組織

(1)研究代表者

佐々木　真（SASAKI, Makoto）
駒澤大学・文学部・教授
研究者番号：７０２６５９６６

(2)研究分担者

丸畠　宏太（MARUHATA, Hiroto）
敬和学園大学・人文学部・教授
研究者番号：２０２０２３３５

剣持　久木（KENMOCHI, Hisaki）
静岡県立大学・国際関係学部・教授
研究者番号：６０２８８５０３

西山　暁義（NISHIYAMA, Akiyoshi）
共立女子大学・国際学部・教授
研究者番号：８０３４８６０６

辻本　諭（TSUJIMOTO, Satoshi）
岐阜大学・教育学部・准教授
研究者番号：５０７０６９３４

(3)連携研究者

原田　敬一（HARADA, Keiichi）
佛教大学・歴史学部・教授
研究者番号：７０２３８１７９

鈴木　直志（SUZUKI, Tadashi）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：９０３０１６１３

(4)研究協力者

松本　彰（MATSUMOTO, Akira）
西願　広望（SEIGAN, Kobo）
斉藤　恵太（SAITO, Keita）